

---

I with...

戯言

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I w i t h . . .

### 【Nコード】

N 0 2 0 5 D

### 【作者名】

戯言

### 【あらすじ】

人間なんて、生きている意味などない……。そんな事を心に秘めて生きてきた高校生、宮内龍也。しかし、ある日突然来た転校生に出会い、生きる意味を探し、苦悩し、見つけた……。そんな感じの物語。でもコメディ。

## ブログ

皆、何のために生きてるんだろう。

俺は時々考える。

だってそうだろう？

皆、明日の暇をどう潰すかを考えるのに必死だ。

目的が無いのならさっさと死ねばいいのに・・・。

ま、こんな事を思っている俺も、たいして生きる意味なんて無いんだけれど・・・。

そう、俺に生きる意味は無い。

## プロローグ（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

間違いなどは見逃してくださいませ・・・。

初心者ですが、将来の夢は小説家なので、感想をできるだけお願いします。自分の間違いなどを研究したいお年頃なのです。

## Chapter 1：転校生

「あゝ、お前ら席につけ！今日から新学期なんだから休みボケを治して、気合入れろ！」

やかましく怒鳴りながら先生が教室に入ってくる。

いまどき怒鳴って生徒が着いてくると思っているのだろうか。  
だったらお笑いだな。俺だったら転校生が来たとても嘘をついて・・。

「あゝ、そういえば今日転校生が来てるんだったな。」

・・・えっ。

「しかも女の子だぞ。」

うおおおおおお！

クラス中ではしゃぎまくっていた男子が叫び声をあげて踊りながら席につく。

まったくなんなんだこいつ等は・・・。

「おい、入ってきていいぞ。」

教室に遠慮がちな女の子がはいってきた。

背が低めでショートカットの活発そうなかんじの顔立ちだ。  
ちなみに結構可愛い。

「うおおおおおお！！！！」

クラスの男子が叫び声をあげる（例外 俺）

転校生はかなり引いている。

まったく何なんだこいつ等はいやマジで……。

「う、うん、じゃあ自己紹介して。」

「な、なつめゆきね棗雪音です。得意なことはスポーツです。

早く学校になれたいので、よろしくおねがいします！」

いったい何をどうお願いするのか分からない自己紹介だったが、緊張しているみたいなので多目に見てやるか。

いや、別に俺が多目に見たって関係ないけどね？

「さて、じゃあ席は……宮内の隣だな。色々教えてもらえ。」

はい、と返事をして、俺、宮内龍也の隣の席に座る。

「よろしくね！」

棗は俺に向かってそういったが、俺はそいつに一瞥をくれただけで無視をする。

俺の無視が不満だったようで、あの手この手で俺を喋らせようとする。

「ねえ、君の名前は？」

「……。」

「誕生日は？」

「・・・。」

「好きなタイプは？」

「・・・。」

「なんで黙ってるの？」

「・・・。」

「反応しようよ。」

「・・・。」

「あつ！あんな所にUFOが！」

「・・・。」

「コノ野郎う・・・！」

秦はついに我慢の限界きたみたいで先生の話し中なのにもかかわらず引きつった笑顔で立ち上がり、

「名前くらい名乗りやがれえ！！」

俺の首をしめた。

「ぐはっ！」

うわ、ヤベえ、この目はマジだ。殺す気だ！

俺はギブアップの意思表示に俺の首をしめている野獣の腕をバシバシ叩いた。

「お、名乗る気になった？」

「吉乃宮蔵三郎。」

俺は咳き込みながらこたえる。

「今時そんな名前の高校生がいてたまるか?!」

全国の高校生の吉乃宮蔵三郎さんごめんなさい……。

また首をしめようとする棗をなだめて本当の名前を言う。

「宮内龍也。」

「それが君の名前だよね？」

「ああ。」

「よし、じゃあメアドと携帯番号教えて！」

「ヤダ。」

「答える。」

突然棗の目が剣呑な物になる。

「わかったよ……。」



俺が、メアドと携帯番号を書いた紙を棗に渡す。

「よし！これで友達ね！」

「お前、何か怖いよ・・・。」

「でしょ？ツンデレを目指してるんだ！」

いや、お前はツンドラだと思ったが、あえて黙っておいた。

新学期早々うるさくなったな・・・。

## Chapter 1：転校生（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

間違いは見逃してくださいませ。

感想宜しく願います。

## Chapter 2：放課後（前書き）

前回の更新より一ヶ月も遅れてしまいました。  
すいません！

## Chapter 2：放課後

その日は始業式だけで終わり、待ちに待った放課後。いや、別に待ってないけど。

「あれ？ひとりでかえるの？」

「ああ、俺あ、友達少ないからな」

「じゃ、一緒に帰ろうよう！」

「ムリ」

「えゝゝ、なんでよ？」

「めんどいから」

どうせ帰る方向違うだろうし・・・。

「えー、いい喫茶店見つけたのに・・・」

「わかった。じゃ、じゃんけんに勝ったらいつてやるよ」

「おっけー、勝ってやるぜ・・・！」

結果、、、惨敗・・・。

大喜びしている雪音の横で後ろに縦線がたくさん見えるくらいになだれている俺、というのが三分後の俺たちの情景だった。

「じゃ、いこーいこー!」

「ああ・・・」

一緒に教室を出る。

学校から出て雪音の後についていく。

向かった先は商店街にあるちよつとレトロな喫茶店。

「私、お金持っていないから、おごってチョーダイ!」

「は、はあ!？」

「私、お金今もってないんだって。だから・・・おごって!」

何故に金を持ってないのに俺を誘ったんだ!？  
もしかしてこいつ最初から・・・？

「うん、おごってもらうつもりだった」

この悪女め・・・。

「そうなら話は別だ。俺はついて来るだけのつもりだった。なのに、  
おこれだと？そんなの嫌に決まってるだろ」

「ううう、せっかくな店見つけたのに・・・」

「知らん知らん。今度別の奴と来るんだな」

「うう、ぐすん・・・。ど、どうしてもだめ・・・?」

う……！雪音が目に涙を溜めて、目をつるつるさせながらこつち  
を見てる……。  
畜生！

「だ……もう！分かった分かった！今回だけな！」

「やった！ありがとう！龍ちゃん大好きっ！」

りゅ、龍ちゃん？

「うんっ、龍ちゃん！だって宮内くんとか龍也さんとかって言う、  
他人行儀な呼び方、嫌なんだもん」

「いや、だからっていきなりあだ名は……。どんな一足飛ばしだ  
よ」

「嫌なの？」

「べ、別に嫌ではないけどさ……。」「

「ま、でもそんなに言うなら、龍也くんって呼ぶ事にする」

「ま、まあ、それなら……。」「

「じゃ、中入ろ！りゅ・う・や・くん！」

「お、おう」

俺たちが中に入ろうとすると、

「ああゝゝ！龍也先輩ですうゝ！」

どこか眠そうな、おっとりした女の子の声。  
振り返ると、同じ高校の一年、春野躑躅<sup>はるのつづじ</sup>が、こっちに向かってBダ  
ッシュしてくるところだった。

## Chapter 2：放課後（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

あまり更新できなくてすいませんでした！

期末テストとか色々あったもんで・・・。

努力はしますが、次も遅くなるかもしれません・・・。

できれば二週間に一回くらいのペースで更新したいんですけどねえ。

感想、意見、どしどし送っていただけると、うれしいなあ・・・？



## Chapter 3：後輩（前書き）

少し遅くなってしまいましたが、ちゃんと投稿できました。間に合った・・・よね？

## Chapter 3：後輩

「ああ〜！龍也先輩ですう〜！」

後輩の一年、春野躑躅はるのつづじがこっちに全力ダッシュしてきて、

「・・・ふみっ！」

もうちょっとで俺たちに届くところで豪快にすってんころりんした。

「へうう〜、痛いんですう〜・・・」

顔面から転んだらしい、鼻が真っ赤になっている。

「う、・・・えっぐつ・・・」

「「・・・。」」

30秒程しゃがんだままえぐえぐいつていたが、いきなり立ち上がって、

「龍也先輩ですう〜！」

登場シーンと同じ言葉を発する。

「先輩、偶然ですね〜、こんな所で会うなんて！」

「嘘吐け」

実はこいつ、学校から出るときから俺たちを尾行してきていたのだが、その尾行があまりにもお粗末な尾行だったので、追ってきているのを見つけたあともほっといただけだ。

「な、何故にバレたんですかあゝ!?」

分かる、普通に分かる。あんなに何度も後ろで転ばれたらな…。

「ま、別にいいんです。とりあえず、隣にいる女の人は誰ですかあゝ!」

「転校「彼女」」

俺が転校生と言おうとしたら、雪音が遮るように彼女と言いやがった。

「か、彼女・・・!」

「いや、違うから」

「うううゝ! 龍也先輩は私のものなんですうゝ!!」

躑躅がとんでもないことを言い始めた。

「私と龍也先輩は一夜を共にしたのかなんですうゝ!」

「一夜ってなんだよ・・・。大体彼女じゃないから」

躑躅は心底驚いたような顔をして、

「え？違かったんですかあゝ？」

「違いーよ」

「よかつたですうゝ、てつきり龍也先輩が私のものじゃなくなつたと思つたですうゝ」

「俺はお前のものになつた覚えもないけれどな」

「はい、そこまで」

俺と躑躅の会話を遮つて雪音が割つて入つてきた。

「龍也君はあたしと喫茶店に来る約束をしてたんだから、君は帰つてくれない？てか帰れ」

「りゅ、龍也先輩の浮気発覚ですうゝ！」

「俺、お前と付き合つてないから」

「いいから帰れ！」

雪音の顔が般若になつてゐる・・・。

「うう・・・、へううううううううううー！」

躑躅が泣きながら走り去つていった・・・。  
哀れだ・・・。

「さ、邪魔者は消えた！入ろ！」

「お、おう・・・」

こいつ怖え・・・。怒らせたらどうなるか・・・。

喫茶店に入って奥の方の窓側の席につく。

「さあゝて、なに頼もうかなあゝ？」

雪音がメニューをじっと見ている。

「決めた！店員さん！」

店員がやってくる。

「ご注文お決まりでしょうか？」

「これ下さい！」

雪音がメニューの一部分を指差す。

「かしこまりました」

「俺はコーヒーを」

「かしこまりました」

そう言って奥の方に入っていた。

「お前何頼んだの？」

「えっとね、ウルTRASPECIALギガントダイナマイツエクセレントパフェ！」

「は？」

「なんすかそのとんでもない名前のパフェ！？」

「それ、めっちゃ嫌な予感する・・・」

「大丈夫大丈夫！」

「その根拠は何処からくるんだか・・・」

「あ、来たよ！」

「・・・げ」

「案の定、それはドでかいパフェだった。まるでエッフェル塔のような・・・」

「それ、何人分だ・・・？」

「えっと、五人分だって」

「いくらするんだ・・・？」

「えとえと、4980円」

・・・。

俺のお金・・・。

俺のお金、どこへ行ってしまうのですか・・・？

「いただきまーす！」

雪音が食べ始める。

10分後。

早々に雪音がギブアップし、残りを俺が必死で片付けていた。  
残すと2000円プラスされるらしい・・・。

・ ・ ・ ・ ・

「おいしかったね！」

「ああ・・・。」

俺はあれから必死でパフェを平らげ、今死にそうになっている。

「大丈夫？」

「もう無理・・・。」

今日、夕飯いらねー。

「だめだよう、お母さんのつくった御飯ちゃんと食べないと」

「あ？俺親いないから」

「・・・え？」

「いや、小さいころに死んじまってな。親戚の所に預けられてたんだけど、高校にあがる時に親戚の家出てきて一人暮らしはじめたんだ」

「へえ、じゃ、あたしと同じじゃん！」

「へ？」

「あたしも親いないんだ。ま、だから引っ越してきたんだけど・・・」

ふーん、こいつも親いないんだ・・・。

「そっか、龍也君も親いないんだ。じゃあ、今日は記念に龍也君の家にお泊りにいっちゃおう！」

「は？」

こいつナニ言ってるんだ。

「そうと決まれば、龍也君の家にLet's go！」

「お、おい！」

一体なんの記念だよ・・・。



### Chapter 3：後輩（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

前回の投稿よりもちよつとだけ早く投稿できました。

次はもっと早く投稿できるように努力します。

なぜか、今学期の反省、的なあとがきになってきてしまいました。

このままだと訳のわからないことを書いてしまいそうなので、この辺で・・・。

次回でお会いしましょう！。感想よろしくお願いします。

## Chapter 4：部屋

「へえ、龍也君も結構大変な人生おくらせてるんだね」

「ま、な」

あれから本当に俺の家に遊びに来た雪音は、俺の身の上話が聞きた  
いと駄々をこねた。

本当は思い出してしまうから言いたくはなかったんだけど、あまり  
にもうるさかったから、特別に聞かせてやった。

・ ・ ・ ・ ・

「俺の両親は、俺が三歳の時に死んだ。家に強盗が入ったんだ。茶  
の間でテレビを見ていた両親を殺し、箆笥の中に入っていた現金十  
万円と通帳を持って逃げた。俺は犯人の気まぐれで命拾いした」

「その犯人は捕まったの？」

「いや、まだ捕まってない」

「そうなんだ、それで？」

「ああ、それで俺はまあ、親戚の家に引き取られる事になったんだけど、後はまあ、定番っていうか、まったく、やっかい物を残して死んでくれたもんだ、的な感じで暴力うけたりメシ食わせてもらえなかったり」

「へえ、そんな事やる人いるんだね。・・・大人なのに」

「そうだよな、俺もびっくりだったぜ」

「それで、その後は？」

「あ？えっと、高校あがる時に、あんたもう高校生なんだから一人暮らしくらいできるでしょ？みたいなトンデモねえこと言われて、金はやるから出て行けって言われて、両親の保険金と通帳渡されて、このマンションに引っ越してきたんだ」

「あれ？でもさっき通帳盗られたって言ってたじゃん？」

「ああ、その盗られた通帳には金、ほとんど入ってなかったんだよ」

「なにそれ」

「だから、盗られた方は少ししか入ってない二セモノで、ちゃんと預金されてた方は違う所に隠してあったんだよ」

「何処に？」

「仏壇の裏」

「なるほど」

・ ・ ・ ・ ・

そんなことを話して今に至る。

「じゃあさ、なんでお前は親死んじまったんだ？」

「火事よ、火事。放火だつて」

「ふーん」

こいつも大変だな。

「ねえ」

「あ？」

「龍也君はさ、その両親を殺した相手を憎んでる？」

「いや、別に。そんな、人を殺すような奴低レベルで話になんないし、両親だつて別に死んだつてこの世に未練があるわけではないだろ。そもそも、人間なんてなんで生きてんのかさえ分からない」

「え？」

「だってそうだろ？皆明日の暇を潰す事ばかり考えてるような奴じゃないか。そんな奴等、生きてる意味なんてないんだよ」

俺は長年体内に収めてきた気持ちを外に吐き出す。

「俺にしたってそうだ。何をするでもなく、ただ何となく日々を生きてる。俺だって生きてる意味のない人間だよ。人を幸せにする事だってできないし、なにか夢があるわけでもない」

「・・・まったく、皆死ねばいいのに」

「・・・龍也君」

永い沈黙。

「・・・生きる意味を探すために生きてる、っていうんじゃないかな・・・？」

「・・・あ？」

「生きる意味の話だよ。確かに今は、龍也君には何もないかもしれない。でも、その何かを見つけるために、今を生きてるんじゃないのかな」

「・・・ああ」

「多分、何もしてなさそうに見えたり、必死に暇を潰そうとしてる人でも、人生っていう道の上では生きる意味を探してバタバタがいてるんだよ。今は自分には何もないけど、将来、絶対に何か大切

な、かけがえのないものを見つけてやるんだーってさ」

「……。」

「だから龍也君も、一生懸命足掻いてる人を、死ねば言いなんて言っちゃダメだよ？」

「返事は？」

「お、おう」

「よろしい」

そっか。

今は何もなくても、必ず何かが見つかる。  
ちよっと希望を持てた気がするな。

「だから、学校でも、いつまでもむすつとしてないで、積極的に明るく振舞うこと」

「それはヤダ」

「なんでよ？」

「あいつらは人の事を勝手に怖がりやがる。怒ってもいないのに、俺の顔色をうかがって教室の外に逃げていく」

「龍也君がいつも仏頂面してるからでしょ。君がニコニコ笑ってればきっと友達になってくれる」

「・・・。」

「小鳥たちは君の肩に止まりたがっているの、チャンスが見つからないだけで」

「そか」

「そうなの」

なるほどね。

「・・・ちょっとしんみりした空気になっちゃったなー。でもだいじょーぶ！夜はこれから！さあ、飲むぞー！」

「おいっ、俺らまだ未成年・・・！」

夜はふけていった。

## Chapter 4：部屋（後書き）

乱筆乱文に失礼。

すいません！遅れました。

二週間に一話だなんて、僕の嘘つき！

次こそはもっと早く・・・！

感想よろしく願います。



## Chapter 5: 部屋 2

ちゅん・・・ちゅん。

穏やかな小鳥の声で目が覚めた。

「くああゝ・・・」

ああ、こんなに気分のいい目覚めは久しぶりだ……。ふと、自分の寝てたベッドの横に目をやる。

┐  
•  
•  
•  
?  
└

布団にわづかなふくらみ。

これはもしや・・・？

「ん  
ふ  
う  
・  
・  
・  
」

ベッドの中には幸せそうに布団に包まっている雪音がいた。

「あーす……！」

「……」

俺は、寝ている雪音にベッドから叩き落された。

「?」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
思い出した。

昨日俺の部屋に押し入ってきたヤツは、いろいろ深い話をした後、しんみりしちゃったとか言って、びっくりするくらいアルコールを摂取し、倒れるようにソファで眠ってしまったんだっただけ。俺は寝ている雪音に毛布をかけ自分はベッドで寝たんだっただけ。それがどうして俺のベッドで・・・。

「・・・。」

ふと時計を見る。

針は十二時三十七分をさしていた。

さいわい今日は学校もなく、昼まで寝てても良い時間だったので俺は少し安心する。

とりあえず、雪音を起こさなければ・・・。

「おい」

「・・・。」

「おきろ」

「・・・。」

「・・・。」

俺は無言で布団のふくらみに蹴りを入れた。

「げふう！」

布団のふくらみは、女の子らしからぬ悲鳴をあげてベッドから転げ落ちた。

ふっ、恐ろしい値段のパフェを奢らされた復讐だ・・・。

「うつうつうつうつ・・・。」

・・・。

布団の中から地獄の奥底から湧き上がってくるようなつめき声が・・・。

「蹴った奴あ誰だ〜・・・。」

「うつ！」

布団の中から手が出てきて俺の手をしっかりと掴んでいる。  
普通に怖ええ・・・。

「蹴った奴あ・・・、誰だ〜！」

「ぎゃー！！！」

ベッドの中に潜み住んでいる魔物が俺に襲い掛かってきた！

「・・・んう？龍也君？龍也君が蹴ったの？」

「す、すいませんでした！」

「じゃあ許す。おやすみ〜」

「おやすみ、じゃなくて！起きろ！」

「なんでえ〜？今日は学校休みじゃん」

「そ、そうだけどさ」

「じゃ、いいでしょ。おやすみ」

「だめだ。お前は昨日ソファで寝ていたはずだ。なのになんで俺のベッドに寝ているんだ。その理由を聞かせてもらえたら寝かせてやる」

「ふえゝ、めんどい」

「じゃ起きろ」

俺は雪音が包まっている布団を引き剥がしにかかる。

「分かった分かった！言うからあたしから布団を奪わないでー！」

「じゃあ早く言え」

・ ・ ・ ・ ・

雪音の話によると、夜中に目を覚ました雪音は自分がソファに寝ていて、俺がベッドに寝ているのを見て、何であたしがソファなのよー！みたいな心境になり、腹が立って俺が寝ているベッドに侵入してきて一緒に寝ていたのだという。

・ ・ ・

自分勝手過ぎだろそれ。

「そもそも、レディをソファに寝かせて自分はぬくぬくとベッドで寝ていて罪悪感を感じないの!？」

「そ、それは・・・。」

でもなあ。

雪音だしなあ・・・。

「きみ、今失礼なこと考えてない？」

「別に」

「ならいいけど」

「・・・。」

「という事で、今日はあたしの買い物に付き合ってもらいます」

「な、なんで俺が!？」

「この高貴なあたしをソファに寝かせたから」

話がつながってねえー!

「じゃ、準備しなきゃ」

むくりと起き上がる雪音。  
その格好は・・・!

「し、下着!？」

「え、・・・きゃっ!」

なんでこいつ下着姿で寝てたんだ？

「あたしの服・・・、どこ？」

「知るかー!」

俺、下着姿の奴と一晩一緒に寝てたんだ・・・。

「見たね・・・?」

「ごめんなさい・・・。」

「責任、とってね・・・?」

知らねーよ。

「今日は、スーパーウルTRASPECIALエキセントリックケーキお  
ごってもらうんだから」

「もう嫌だー!」

今日一日も長くなりそうだった。

## Chapter 5：部屋2（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

こゝ、今回はいつもより早かったですよね・・・？

これだけの文章でも結構時間かかるんですね・・・。

## Chapter 6: ショッピング

「せっかくの休日なのに……。」

俺は今、雪音の買い物に付き合っている。

「せっかくの休日なのに……。」

なんで家で寝てられないんだー!!

「ほら、速く歩け荷物持ち! 一日は短いんだぞー!」

「なんで俺はお前に良いように使われてるんだよ!」

「え? それは、君が寝てるわたしを蹴って起こしちゃったからだよ?」

「それはそうだが……。」

お前自分勝手すぎ……。

「寝ているわたしを起こした罪は重いんだよ!」

それはお前が勝手に俺のベッドに入ってきたから……。

「自業自得だっって言っんでしょ?」

「当たり前だー!」



俺に悪い要素はほとんど無いぞ！

「なに言ってるの？そもそも君がわたしをないがしろにしたのが悪いんじゃないかあ」

「知るか、んなもん」

「ま、そんな事はどうでもいいんだけど」

ようするにこいつは荷物持ちが欲しかっただけなんだな・・・。

「いや、それだけじゃないよ？」

「じゃあなんだってんだ」

「奢ってくれる人を探してたんだよお」

俺から言わせれば同じようなもんだけだな。

「よし、じゃあ今日のメインイベント！昨日行った喫茶店ででっかいケーキを食べよう！」

もちろん経費は・・・、

「龍也くん持ちね！」

やっぱりな・・・。

「さて、れっつー！」

「あああああああああつ！龍也先輩はっけんですう〜！」

うるさい後輩が道の向こうから駆けてくる。

「龍也せんばはぐうっ！」

思いっきりコケた。

痛そうに打った鼻をさすりながらこっちへよって来る。

うるさい後輩、春野躑躅、前回と同じような登場シーンだった。

・・・。

こいつ、学習能力ないのか？

「龍也せんばい〜、いたいですよっ」

確実に俺のせいじゃない。

「だってえ〜、龍也先輩があたしに振り向いてくれないからあ・・・。  
」

それだって、俺のせいじゃないじゃないか・・・。

「はうあつ！あたしってそんなに魅力なかったんですかあ・・・？」

「おい、一人で勝手にどんよりモードONしてんじゃねえよ」

「ちょっと、またわたしと龍也くんの甘い時間を邪魔しに来たの？」

雪音が躑躅を睨み付ける。

「違いますよう、あたしはただ龍也先輩について回る意地汚いドロボー猫を追い払いにきただけですよう？」

「へえ・・・、いい度胸じゃない」

おお、二人の視線の真ん中くらいで火花的なものが散っているのが分かる。

こ、これは怖い・・・。

「まっくてくださいねえ？龍也先輩。今この邪魔な女を引き裂いてみせますう。龍也先輩はあたしだけを見ていればいいんですよう？」

ヤ、ヤンデレ・・・！

「ふん、かかってきなさい！」

「いくですよっう？・・・きええええっ！」

「やめろ、恥ずかしいから」

「「え？」」

道のド真ん中で火花を散らすこいつらのおかげで、目立ってしょうがない。

しかもこいつらの喧嘩の原因が俺の奪い合いだからな。

「本当に俺の事を思ってくれているなら、今すぐ目から出している火花を収めて少し落ち着け」

「はいいゝ、今すぐやめますうゝ」

「しょ、しょうがないなあ……。やめてあげるよ。でも、龍也くんのためじゃないんだからね！しょうがなくなんだからね！」

いまさらツンデレやってもお前のキャラはそれ以上拡がんねえよ。

「別にこいつがいてもいいだろ？どうせ俺が奢る事は決定事項なんだしな」

ていうか、俺今自分で、俺が奢る事は決定事項とかいつちまった。なんという奴隷根性。なんというヒモっぷり……。

「……もう、しょうがないな……。……チツ、せつかく龍也くんと二人つきりでデートだと思ったのに……。」

「ん？なんか言ったか？」

「ううん、なんにも？」

「ならいいけど」

やれやれ、今度はどんなとんでもないもの奢らされるんだろうな。



## Chapter 6: ショッピング (後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

今日、奇跡的にパソコンがつかまりました！

けど、ホントに奇跡的なのでやっぱり更新またできなくなると思います・・・。まだ新しいの買う予定もないので、次の更新は、奇跡的についたときです。

それまでまた待っていてください！

## Chapter 7: ショッピング2 (前書き)

このPCの調子がいいです。

## Chapter 7: ショッピング2

「はっ！食べた食べた！」

「おいしかったです・・・！」

「うっ・・・、つぶ・・・。」

俺たちはあの後皆で喫茶店に入り、約束どおりトンデモないケーキを奢らされた。

案の定、こいつらは途中でへばり残り半分以上残っていたケーキを俺が完食。

だいたいなんで三人でケーキを1ホール食べようと思っただろうな・・・。

しかも、大きさがとんでもなかった。

まるで樹齢千年以上の大木の丸太のようだった。

俺、よく頑張った・・・！

「先輩、大丈夫ですかあ？」

躑躅が心配顔でこちらを覗き込んできてる。

「も、もうダメかもしれん・・・。」

頭の中がぐらくらする・・・。

俺、死ぬのかな・・・？

「大丈夫よ、だって龍也君だし」



俺だから大丈夫なのか？  
なんの根拠もねえな。

「そうですねえ、龍也先輩ですもんねえ」

「納得するなよ」

こいつらは一体何様のつもりなんだよ。  
だんだん腹が立ってきたぞ。

「でも、奢ってくれて、ほんとにありがとうでしたあ」

「いや、別にいいさ」

「でも、あんなに高かったのに・・・。」

そう、あのケーキはパフェ以上に高かった。  
その値段、なんと7000円。  
財布の中身が危なかった。

「そういえば、龍也君ってアルバイトとかしてるの？」

「いや、何にもしてねえけど」

「じゃあ、お金の出所はどこ？」

「死んだ両親が残した金」

「へえ？幾らくらいあんの？」

「五億」

「はあ！？なんでそんなに稼いでんのよ、君の両親」

「知らん、宝くじでも当たったんじゃないのか」

「でも、そんなにあるならもっと奢ってくれてもいいよね！」

「お、お前、まだ俺に奢らせる気が・・・。」

罰当たりな奴め・・・。

大体、俺は今日の手持ちの金は尽きたぞ。

「冗談だよ、嘘嘘」

お前のは冗談に聞こえない。

「でもお、先輩って結構お金持ちだったんですねえ」

「まあな」

「びつくりしましたあ！・・・先輩と結婚すれば一気にお金持ちになれる・・・。好きな人といっしょに居られて、なおかつお金もがつぱり・・・、きょうーん！薔薇色人生ですう！」

「な、何をいきなり叫んでるんだ！びつくりするな・・・。」

「そうよ！大体龍也君はわたしのものなんだからね！」

「・・・。」

俺は誰のものでもねえよ。

「さつてと、疲れたしそろそろ帰るか！」

「ああ・・・。」

やっと一人になれる・・・。

「じゃあ、龍也君の家に？」

「れつつ・ごーですうゝ！」

「・・・は？」

こいつら今何を言った・・・？

「はやくう、龍也君！置いてくよ？」

「おいっ、ひとの家に何勝手に・・・！」

やれやれ、まだ俺には安らぎが来ないみたいだ・・・。

## Chapter 7: ショッピング2 (後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

このごろ、パソコンのつく確立が少し上がった気がします。ちゃんと時間を守って投稿できるので嬉しい限りです。

このまま直ってくれるといいんですけどね…。

では、また次の話でお会いしましょうー。

## Chapter 8：部屋（前書き）

すみせん、いつもより更新遅かった気が・・・。

## Chapter 8：部屋

「はい、龍也君！あゝんして？」

「だめですうゝ！先輩はあたしが食べさせてあげるんですうゝ！」

・・・。

俺は一人で食える・・・。

「龍也君！早く口開けてよゝ」

「ほらほら先輩、あゝんですよっつ？」

「・・・っ」

「っ？」

「うるせえええー！」

俺は怒鳴る。

この状態だ、怒らんほうがおかしい。

「きゃあ！龍也君が怒鳴った！」

「へうゝ・・・。怖いですう・・・。」

「お前等、うるせえぞ！メシぐらい一人で食えるんだから少し静かにしてろ！」

「「は、はい……。」

ふう。

やっと静かになった。

「……じゃあ、今度は躑躅ちゃんに食べさせてあげるよ」

「あ、じゃああたしも雪音先輩に食べさせてあげますっ」

お、こいつ等仲良くなったんだな。

「ぎぎぎぎぎぎ……。」

「ぐぐぐぐぐ……。」

こいつら、お互いの口に何もついてないフォークを押し込んで喉を刺そうとしてやがる……。

こいつらが仲良くなるのはまだ先になりそうだな。

「ほら、止めるよ二人とも」

「ぎぎぎぎぎぎ……。」

「ぐぐぐぐぐ……。」

ぷちっ。

俺の頭の中で何かがはじける音がした。

「てめえら……、いいかげんにしろやコンチキショー……!」

「「！」「」

俺はもう我慢の限界だった。

「黙ってみてりやいい気になりやがって、ここは俺ン家だ！静かに  
できねえなら出てけ！」

「「・・・。」」

ふう、やっと黙ったか。

俺は気を落ち着けて言う。

「もう一度言うが、ここは俺の家だ。郷に入っては郷に従え、これ  
からは俺のルールに従ってもらう」

「は、はい・・・。」

「分かったんですぅ・・・。」

まず一つ。

「喧嘩はするな、どうしてもしたいなら外でやれ」

二つ。

「後片付けはきちんとする。出したらしまう、それが基本だ」

三つ。

「仲良くしろ、以上だ。もし、また何か変なことをするようだった



らその都度きまりを増やしていく」

「……。」

「……わかったか？」

「はい！」

よし、これでOKだ。

「じゃあ、俺は寝る」

「え？もう寝るの？」

「ああ、明日は学校で朝早いだろ？」

「でもまだ11時……。」

「もう11時だ。お前らはどうするんだ？」

「わたしはここに泊まる。夜遅いから外出るのやだし」

「じゃあ、あたしも泊まるんです」

「じゃ、お前らがそのベッドを使い。俺はソファで寝る」

「ありがとうございます」

「じゃ、寝るぜ。おやすみ」

「「おやすみ」」

ふう、やっと眠れる・・・。

がさがさ、こそこそ。

「ふふ、はははー！ひゃー！」

「うふ、ひひひ。はー！」

「おまえらうつせえぞ！」

やれやれ、やっぱり俺に安らぎは無いんだな・・・。

## Chapter 8：部屋（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

いつもより更新遅かったですよね・・・。

やっぱり長さがこれだけでも構想練るのに時間かかりますね。

次からはちゃんと短期間で投稿するようにします・・・。

頑張ります！

では、次の話でお会いしましょう！。

## Chapter 9：学校

「ふうっ……。」

朝から疲れる……。

なんでいきなり俺、人気者になってんだ……。

それもこれも、あいつ等の所為だ……。

・ ・ ・ ・ ・

朝、棗雪音と春野躑躅の二人を連れて家を出た俺は、三人でゆっくりのんびり通学路を歩く。

本当は朝にも一悶着あったのだが、それは割愛しておきましょう。

学校の前に来ると、校門の脇に人だかりができていた。

俺らが入ると、皆が一斉にこっちを見て、

「ちつくしよおおっ！龍也、羨ましいぜ！」（主に男子）

「龍也君を……。私の龍也君を……。！」（主に女子）

「「「へ？」「」」

皆の目がギラギラしているぞ・・・！

「とりあえず、逃げるぞ！」

「う、うん！」

「ああーん、龍也先輩、愛の逃避行ですねぇー！」

俺らは教室までダッシュする。

とりあえず教室まで行けば安全だと俺はそのとき考えた。

しかし、それは浅はかな考えだった事を教室についてから知る。

やっと教室まで来た俺らは、衝撃の真実を目にする。

なんと、

「「「龍也……………」」」

「「「雪音ちゃんと躑躅ちゃん……………」」」

「「「げ」」」

俺らはあつという間に取り押さえられた。

誰かが、俺の家の前を通ったとき偶然俺の家の中から出てくる俺達を見つけたらしい。

それを見つけた奴が皆に告げ口して、モテない男子連中が俺を追いかけてきたみたいだ。

羨ましいぞ、この野郎、と。

それは幾らなんでも自分勝手すぎねえか？  
ていうか、じゃあ女子は何だったんだ？

その後、色々と質問攻めに遭い、今に至る。  
躑躅は泣きながら一年の教室に帰った。

「まったく・・・。」

なんでいきなり俺人気者なんだよ・・・。  
俺はもつと小ぢんまりとした生活を送っていたのに・・・。  
そんな事があつて親近感が出てきたのか、皆から結構挨拶をされる。  
いつもなら、誰も目さえ合わせないのにな。

「ふええ・・・。」

お、雪音が帰ってきた。

こいつは俺が男子どもから尋問を受けていたとき、女子に連れられていった。

「どうした、大丈夫か？」

「らいひょうふりやらいい・・・。」

「・・・。」

何言ってるのかわかんねえ・・・。  
多分大丈夫じゃないって言ってるんだろうな。

「ふえうつうう・・・。」

雪音が席に倒れこむ。

・・・。

この調子じゃ躑躅の方も無事じゃないだろうな。

「何されたんだよ？」

「別に何もされてないけど・・・。」

「嘔吐くなよ」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・龍也くんに手を出すな、ってさ」

「・・・そか」

「うん・・・。」

「気にすんなよ」

「うん、大丈夫だよ」

雪音は俺に向かって笑顔を見せる。

・・・。

こいつ、結構可愛いな・・・。

「どうしたの？龍也くん、顔赤いよ？」

「な、なんでもねえよ！それより！躑躅の様子見に行ってみようぜ。お前がその状態だ、あいつも無事じゃ済んでねえだろ」

「そうだね！」

案の定、躑躅もボロボロになっていた。

「おい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですう」

・・・。

全然大丈夫じゃなさそうだけどな・・・。

「お前は何されたんだ？」

「龍也先輩に手を出すなってえ・・・。」

「お前もなのか・・・。」

なんで俺に手を出すな、なんだろう・・・。

「だって、先輩のファン、たくさんいますよう？」

「「ファン？」」



「そうですね？知らなかったんですかあ？」

「で、でもなんで……。」

「あのクールな横顔が素敵だとか、あの先輩は絶対ツンデレだから、あのクールな仮面を剥いで甘えさせたい、とか……。」

「は……。」

ツンデレ？俺が？  
なんじゃそりゃ。

「でもあたしはまけないんですう！必ずや龍也先輩をこの手にい！」

「なにおう！私も負けないんだからあ！」

「勝手に人の争奪戦をすんなよ」

ていうか、俺いつからそんなにモテモテになったんだろうな。

俺は今まで冴えないインドア派を演じてきたはずなんだが……。

「冴えないインドア派？何処がですかあ？体育の時間あんなにファインプレーを連発してたのにですかあ？演じるんならもつと徹底してやりましょうよう」

「あ……。」

そうだった、そう言えば俺は体育の成績はいつも5だな。  
俺としては手加減しているつもりなんだがな。

「そんなこと言ったら、皆からさらに嫉妬と羨望の目でみられますよう？」

でもなあ。

「よし、わかった！今度から私が隣で龍也くんの凄さを宣伝してあげるよ！」

「いらん！」

そんな事されたら俺はさらに人気者になっちまう。

俺は山の中で仙人みたいな暮らしをするのが夢なんだな。

「そんな事言わないで！ね？遠慮しないでいいからさ！」

「あ！そしたらあたしも手伝うですう！」

「お願いだからやめてくれえ！」

やれやれ、雪音がきてからやっぱ俺に安息がなくなってきたな・・・。

でも、このごろ楽しいと思ってしまうのは俺の気の迷いなのか？

## Chapter 9：学校（後書き）

乱筆乱文誠の失礼。

今回は更新結構早く更新できてよかったです。

PCもこの頃調子が良くなってきて、いい感じでした。

ただ、この頃感想書いてくれる人が少ないです……。

できれば、なんでもいいので感想お願いします……。

## Chapter 10 : 学校&帰り道 (前書き)

更新遅かったですね…。すいません。

## Chapter 10：学校&帰り道

「くっ…、やっと落ち着いた…。」

俺は今、トイレの個室の中にいる。

そんな所にもいないと、落ち着いていられないからな。

大体、教室があんなに居辛いところだとは思わなかったぞ…。

俺が机に座っているだけで、誰かが話し掛けてくる。

俺は今までの生活上、他人と話す事がほとんど無かった。

ほぼ皆無だ。

それは、俺が今まで教室で仏頂面を崩したことが無かったから、皆が俺のことを怖がっていて、俺に寄り付こうとする奴がいなかったからで。

それでも俺に親しく接しようとした奴は、俺が冷たく突き放すのが普通で。

大抵の奴は、それでもう俺に寄り付く事が無くなった。

それでもへこたれずに俺のことを追いかけてまわしてきたのは躑躅一人である。

そう考えてみると、躑躅は強いよな…。

今まであいつにはひどい事を言ったり、冷たく接したりしていたから。

今になってそれを痛感する。

ごめんな、躑躅…。

「っと、こんなところで感慨に浸っている場合じゃなかったな」

もうすぐ授業が始まる。

授業くらいは出ないと…。

「そろそろ出るか」

俺はトイレから出て教室に向かう。

向かう途中の廊下で、何度も声を掛けられる。  
鬱陶しいったらありやしない。

そして、教室に入る。

「龍也くん、また怖い顔になってるよ」

「仕方ないだろ、今までずっとこんな顔してきたんだ。今更どうこうできるか」

入ったとたん、雪音に声を掛けられる。

「ほら、せっかく龍也くんにもお友達ができそうなんだから、そのチャンスをフイにしたら駄目だぞっ？」

「わざわざ可愛らしく言おうとすんじゃないねえ」

「ほー、龍也くんはひどいねえ」

そうこう言っているうちに先生が入ってくる。

「おら、席につけ席に！さっさと授業はじめるぞー！」

・ ・ ・

・ ・ ・

「さてと、今回はここまで！ちゃんと復習してくるんだぞ」

ふうあああ…、やっと終わったあ…。

「あ、あと宮内！放課後職員室来い！」

へ？俺か？

何で俺が…。

特に何も悪い事してないぞ？

「へっへ〜ん、龍也くん、呼び出された〜！」

「うつさい！」

いちいち雪音がちゃちゃを入れてくる。  
でも、何でだろ…、ホントに心当たりがないな。

・ ・ ・

放課後。

授業が全て終わり、皆が部活へ行ったり、家に帰宅する最中、俺は

職員室の前に立っていた。

「……………」

畜生、緊張する…。

職員室ってこんなに入りにくい場所だったのか…。  
でも、駄目だ。

こんなところでうろついてても始まらない。  
意を決して、ドアをノックする。

「し、失礼します…。」

入ると、先生がこっちに手招きをしていた。

「…?」

おとなしく近づいていく。

「あゝ、呼び出して悪かったな」

「いえ、別に構いませんけど」

なんだ、起こられるんじゃないのか？  
嫌にぺこぺこしてる感じなんだけど…。

「実は、折り入ってお前に頼みがあるんだが…。」

「…? なんです?」

「それがな…。」



・ ・ ・ ・ ・

帰り道、俺は柄にもなく悩んでいた。

それは、職員室で言われた話が原因だった。

その話とは、簡単に言うと不登校の女子を学校に来させて欲しいというのだ。

なんで俺が？って感じだろ？

俺がなんでだと聞いたら、こんな答えが帰ってきた。

「実はな、彼女が不登校になった理由はお前にあるんだ」

「はあ？」

その子は、俺のことが好きだったらしい。

そして、俺の靴箱にラブレターとか言うやつを入れたんだそうだ。

それで、俺がどんな反応をするかというのを、靴箱の陰に隠れて見ていたんだそうだ。

そのとき、俺がとった行動とは…。

「お前、その手紙、その場で破り捨てたんだそうだな」

「げっ？」

見てたのか…。

そもそも、ラブレターなんて俺の靴箱に毎日のように入ってるものだしな。

いちいち確認したりしないで捨てるのが俺のいつものやり方だ。しかし、本人が見ていたなんてな。

「という事で、責任を取れ」

そう言い渡されて、その子の家までの地図を握らされ、職員室から追い出された。

そして俺は、今その子の家に向かっている途中。  
一体どうすりゃいいんだろっとな…。

そんな事を考えてるうち、その子の家に着いた。

「ふう…。」

俺は、少し考えてから。

「ピンポン」

呼び鈴を押した。

## Chapter 10：学校&帰り道（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

すいません、更新遅れちゃいました。

また危なく一ヶ月放って置くところでした…。

ところで、これを書き始めたとき辺りに、連載もひとつ始めました。  
興味のある方はそちらもどうぞ…。

感想よろしくお願いします。

## Chapter 11：帰り道&友達三号（前書き）

パソコン新調。

## Chapter 11：帰り道&友達三号

ピンポン。

俺は覚悟を決めて呼び鈴を押した。

数秒待ってインターホンから声が聞こえる。

「はい…、どちら様ですか…？」

疲れたような女子の声。

マジ幽霊みたいだなおい。

俺は答える。

「あ…、宮内ですけど…。」

「りゅ、龍也さんですか!？」

とたんに女の子の声が元気のある声に変わった。  
一体なんだこの変わりようは…。

「な、何でここにいますか!？」

どうしようか…。

ここは嘘をつくべきなのか？

「えっと、俺のせいで学校来てないって聞いたから、心配になって

な…。」

「…え？龍也さんがわたしの事を…？うれしい！今行きます！」

「いや、別に…！」

俺が言い終わらないうちに、ドタドタと階段を駆け下りる音がする。やれやれ、ほんとにはインターホン越しだけで励ましの言葉を掛けるつもりだったんだけどな…。

「お待たせしました！」

突然勢い良くドアが開き、小柄な少女が顔を出す。髪はロングで、物静かそうで端整な顔立ち。純粹で清楚なイメージだな。

「お、おう…。」

いきなりの登場に戸惑う俺…。  
結構な美少女だぞ…？

俺はこんな奴に告白されてたのか…？

「あ、あの…！」

いきなり真っ赤になってうつむいちまったよ…。  
うーん…。

俺、どうすればいいんだ？この状況…。

「わ、私の名前、わかりますか…？」

「くっ！」

……。  
わかん。

先生からは何も聞いてない…。

インターホンを押すときも名前見なかったしな…。

「やっぱり、知らないんですね…？」

「そ、それは…！」

いきなり涙を流しだす彼女。

「ここに来たのも先生に言われて来ただけで、自分の意思で来た訳じゃないんですね…？」

「まあ、そうだな」

「やっぱり…。」

「悪いな」

「いえ、いいんです…、多分そんな事だと思ってましたから…。」

うう…。

なんだろう、この胸の奥から湧き上がる罪悪感。  
なんか物凄く責められている気分だぞ…。

「な、なんかゴメン…。」

「いえ、龍也さんが謝る必要なんて無いんです…、わたしがラブ  
ターなんて入れて勝手に傷ついただけなんですから…。」

……………？

なんか更に責められてないか？

「あ、あの…！お願いがあります！」

「ん？なんだ？」

「もう彼女にしてくれなんて言いません！だから、友達から願  
いします！龍也さんはあまり友達を作りたいがらないのは知っています  
！でも…！」

友達を作りたいがらない、ねえ…。

「ま、友達くらいならいいけどな」

「ほ、本当ですか！？」

「ま、また付き合ってとか言われても困るけどな」

「あ、ありがとうございます！」

深々と頭を下げられる。

そんなに感謝される事なのか？

「えっと…、」



「わたしの名前は、御厨みくりやこのは、です！」

・ ・ ・ ・ ・

「は？その子どうしたの？」

「…友達だ」

あれから俺たちはこのはの家でお茶をした後、このはを俺の家に誘った。

話してわかったのだが、このははかなり引つ込み思案のようだった。俺にラブレターを出したのも一大決心だったらしい。

俺、悪いことしたな…。

これから気をつけよう。

おっと、話しは逸れたが、このははその引つ込み思案な性格で、友達がいなかったそうだった。

だからうちには雪音や躑躅がいるから、いい友達になれると考えたわけだ、俺は。

「あ、えっと…、御厨このはと言います！よろしくお願いします！」

「もしかして…、」

「これは…、」

「「ライバル出現!？」」

「そんなんじゃねえって」

……。

これでまた俺に周りが騒がしくなるな。

こうやってると、もしかして俺自身が面倒事を引つ張り込んでるんじゃないのか？

それにしても、数日で変化が有り過ぎだろ、俺の人生…。

## Chapter 11：帰り道&友達三号（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

パソコン新調しました！

色々便利になりました。

これで気持ち良く小説を書けるといっものです。

これからも頑張りますよー。

感想お願いします。

## Chapter 12：逃走中（前書き）

毎度ありがとうございます。

## Chapter 12：逃走中

「ちょっと！まってよ！」

「嫌だ！ッ絶対に待たん！」

後ろから追いかけてくる雪音。

それから必死で逃げる俺。

・・・。

何でこんな状況なのかと言うと。

・ ・ ・ ・ ・

俺がこのはを連れてきてから、雪音と躑躅は一気に不機嫌になった。なんでも、ライバル出現だそうで…。

それはこのはと同じみたいで、普通は仲良くしているのに、俺が絡むと急に喧嘩腰になる。

「龍也先輩には、あたしが食べさせてあげるんですう！」

「いいえ！私が食べさせるんです！」

「いや、わたしよ！…べ、別に、龍也くんのためなんかじゃ…ない

んだから…、もうっ、ばかあ！」

「もうツンデレはいい…、てか飯ぐらい自分で食えるからほっとけ！」

みたいなやりとりがしばしば。

これじゃ俺が悪いみたいだな…。

そこで、行き着いた先が、

先に龍也くん（さん、先輩）を自分の物にしなれば…。

だったようだ。

そしてその時から俺は、血（いや、俺か…。）に飢えた獣どもに追  
い掛け回されているわけで…。

．．．．．

こういう状況だ。

とんだ災難つてもんだ。

「何で嫌なのよー！いいじゃない！わたし、そこそこ可愛いんだから！」

「いや！そういう問題じゃねえから！」

俺はこの小説を18禁に指定するつもりはないぞ！  
きつと18歳未満の人も読んでるしな。

「でも、外伝とかならいいかも…。」

「え？なんの話？」

「いや気にすんな、独り言だ」

迫り来る躑躅やこのはをかくぐりここまで逃げてきたってのに…。

「くっ、ここまでか！」

「そう、ここまでよ！…ふっふっふ、観念なさい！」

路地裏、俺の後ろは壁。

逃げ場はない。

……。

「龍也くん！かあくごぉー！」

「待った！今日は止める！今度相手してやつから！」

「…え？ほんと？」

もちろん嘘だ。

ただ、この場を切り抜けるには…。

「そもそもまだ俺たち、出会ってから二週間しか経ってないじゃな

いか、まだお互いの事を良く知りもしないのに、そういう行為に及ぶのはいけないと思うんだよ！うん！」

「た、確かに…。」

「だろ！？だからもう少し待ってくれ。俺の心の準備が出来るまで…。」

「…うん、わかったよ、待つ。ちゃんとわたしに振り向いてくれなきゃ、…駄目なんだから…。」

そういつて雪音は、顔を赤らめ逃げるように去って行きましたとき。  
…………。

成功しちゃったよ。

やってみるもんだな…。

「しかし、もし嘘だとばれたら…。」

確実にとんでもないことになるだろうな。

しかも、仮にばれなかったとしても今まで以上に追撃が激しくなるのは必死だ。

「畜生、ふたをした筈のくさいものがパワーアップして帰ってきやがる」

やっぱりその場しのぎじゃ駄目なのか。  
ほかに考えられる、これからの策は…。

「ほんとに彼氏になってやる、か？」



……。

いやいやいやいやいやいや。  
だめだ。

それは無い。

俺の身が確実に危うい。

いったい何をされられるか分かった物じゃない。

「しかも、誰か一人を選んだら俺がほかの奴に……。」

殺られる。

確実に。

「俺の将来ってお先真つ暗じゃないか!？」

助けて天国orその他にいるお母様&お父様!

その鋼の肉体であなた方の不肖の息子を救ってくださいませ!

「……………」

無理だよなあ。

大体俺の両親の肉体は鋼じゃ無かったし。

え?そういう問題じゃない?

「…とりあえず家に帰るか」

やれやれ。

家に帰るといのがこんなに憂鬱だったのは初めてだ。

でも、なんとなくちょっと楽しみなところもあるんだよな。  
俺の周りは昔と比べてずいぶん騒がしくなっちゃったけど。

これはこれで、ありなのかもしれない。

## Chapter 12：逃走中（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

これから更新はこれぐらいの早さになってしまいかもれません。  
もうひとつの連載物と変わればんこの順番ここで更新していくので…。  
なので、もうひとつの連載物と変わればんこで読んでいただくとち  
ょうどいい…、かな？

感想、質問よろしくお願いしますv

## Chapter 13：探し人（前書き）

ちょっとシリアスに仕上げてみました。

## Chapter 13：探し人

「ひい…、やっと家に着いたぞ…。」

夢にまで見た玄関の扉。

どうやら必死に雪音から必死に逃げていたから、随分遠くまで走っていたようだ。

帰ってくるのに二時間かった…。

俺はいつたいどれくらいのスピードで走っていたんだろうな？

不幸なことに財布も持っていなかったため、徒歩での帰り道。あれほど金が欲しいと思うのは、最初で最後だっただろうな…。

鍵がかかっている扉を開けて、家に入る

「ただいま…。」

疲労困憊した俺は、すぐさまソファに寝っ転がる。

シャワーを浴びる元気もないぞ…。

やっと家に着いた安心感で眠気が襲ってくる。

そこでひとつ気付いた。

「……雪音たち、どこにいるんだ？」

いつもなら帰ってくるとすぐ玄関に顔を出し、じゃれてくるあいつらが。

俺が帰ってきててもなんのアクションも見せないとは。

「明日は、トマトの雨が降るかもな」

くだらない思考はおいといて、あいつら、家にはいないのか？

……そういえば家に鍵がかかってたな。  
いつもならあいている筈なのに。

もしかして、

「まだ帰ってきてないのか？」

俺を追いかけてきてから、まだ俺を探し彷徨ってるとか…。

……。

恐ろし過ぎる！！

あいつらのことだから絶対他人に迷惑をかけている。  
たとえば、

「オラア！龍也先輩はどこにいますかあ！！吐きやがれですう  
コラア！！」

「ひ、ひい！お助け〜！」

みたいな。

このはに限ってそんなことは無いだろうが、それに近いことはして  
そうだな。

あいつは俺がかかると見境なくなるし。

「…じゃあ何で雪音は帰ってこないんだ？」

あいつには俺が言って聞かせたし、それで納得して帰っていったはずだ。

あいつが俺のことを探しているなんて事はない筈なんだが…。

「…とりあえず探しにいつてみるか」

やれやれ、息つく暇も無い。

俺はすぐさま外に出て、三人の搜索を開始した。

・ ・ ・ ・ ・

三人は携帯をもって行つてなかった様で、町中を風潰しに探すしかなかった。

躑躅は予想通り、帰宅途中のサラリーマンに襲い掛かっているところを発見した。

「お前はいつたい何やってんだよ…。」

「だって先輩がいなくなっちゃったんですよ？誰かに襲い掛かりたくもなっちゃいますう！」

「……………」

こいつは絶対一人にはいけない。  
かばんの中にでもいれて持ち歩かなければ。

このはは隣町のスーパーマーケットの前で体育座りで縮こまって泣いているところを発見した。

心配のあまり近所のおばさんが隣で慰めてくれていた。

……。

こいつはこいつで何やってんだか。

近くによると、

「あんだ！なんでこの子のそばにいてあげないの！」

「い、いいんですおばさん！私が勝手にそばにいただけなんです！その人は悪くないんです！」

「でもねえ、こんな可愛い子を泣かせちゃ駄目じゃないの！この子はこんなにあんだのことを想ってるんだから」

「そんな！いいんです！龍也さんの所為じゃないんです！」

……。

そんなやり取りが五分ほど続いて。

おばさんから解放された俺たちは雪音を探す。

しかし、

「なんでこのははペロペロキャンディーなんか握り締めてるんだ？」

「さっきのおばさんがくれたんです、わたしが泣き止まないから」

「…お前はガキか」



うれしそうにキャンディーをなめるのは。  
ほんとに子供っぽいな…。

「…あとは雪音だけなんだが」

なかなか見つからん。

一体どこをほつつき歩いてるんだか。  
そのとき。

携帯の着信音が鳴った。

画面には見慣れない番号が映っている。

「誰だ？」

とりあえず出してみる。

「もしもし？」

「宮内龍也か？」

聞き覚えの無い男の声。

「どちら様でしょうか」

「栞雪音を預かっている。返して欲しくは今すぐ三千万用意して六  
丁目公園へ来い」

それだけ言って電話は切れた。

おい。

ちよつと待てよ…？

俺は、二人に先に家に帰っているよう言つて、銀行に走つた。

犯人に言われた通りにするのも癪だったが、今はそうするしかない。俺は、かなり焦つて気が動転していた。

銀行で金をおろしたが、どう持つて行つたものか悩んだ挙句、銀行の人にバッグを借りて公園へ走つた。

このとき、初めて両親が残した莫大な遺産に感謝した。

六丁目公園は銀行から遠かつた。

このはを探しに隣町まで来ていたので、また戻らなければならなかつた。

ほんとに何も考えていなかったから、電車やタクシーを使おうなんて思いつかなかつた。

やれやれ、今日はほんとに走ることが多い。

六丁目公園に行くと、雪音が一人で立っていた。

俺は慌てて雪音に駆け寄る。

「あれ？さっきの電話の男は？」

「…あれ、近所に住んでる通りかかったおじさんなの」

「……………は？」

意味がわからん。

何で近所のおじさんが俺に脅迫電話を？

「だから、これはいたずらなの！」

「…なんだって？」

いたずら？

じゃあ、

「さっきの電話は嘘か？」

「う、うん…。」

「ば、」

馬鹿野郎、と。

大声で怒鳴ろうとしたのに。  
安心感で声が出ない。

「無事で、よかった…。」

俺は思わず雪音を抱き締める。

「龍也くん、泣いてるの…?」

自分でも知らないうちに。

俺は涙を流していた。

久しぶりに流した涙。

両親が死んだ時にも流せなかった涙。

それが、なんでこんなときに。

俺は地面に投げ出した三千万も忘れて、しばらく雪音を抱き締めていた。

## Chapter 13：探し人（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

今回はちよっぴりいつもと違う雰囲気では上げてみました。

僕の今の心がこんな感じなので…。

というか、自分でこの小説読み返してみたら、やたらと三点リーダーが多いんですね…。これです。

ちよっと自粛しないとかも。

感想よろしくお願いします。

## Chapter 14 : Find

雪音との帰り道。

何故、あんな人を心配させるような冗談を実行に移したのだろうか。

それこそ、近所のおじさんまで使って…。

その理由を歩きながら聞いた。

「だって、…不安だったんだもん…。」

「不安って…、何がだよ？」

雪音はとつとつと話し始めた。

「昼間、龍也くんはもう少し待ってくれって言ったよね？わたしたちがいかかわしい行為に及ぼうと龍也くんを追い掛け回してたときにさ？わたし、その時は勢いで納得しちゃって、龍也くんにもう少し経てばその気が起きてくれるんだと思って、舞い上がっちゃって…。」

得意のツンデレまで披露しちゃったし。

…でもね、家に帰る途中で考えたの。もしかしたら、さっきの言葉は嘘なんじゃないか、って。それこそ、臭いものにふた、みたいな感じで…、わたしが邪魔つけだったからその場ではっと嘘をついてわたしを追い払おうとしてたんじゃないかって。

…わたしは龍也くんが大好きだから、龍也くんを疑いたくなかった。でも、それと反面、きつと龍也くんならそういう嘘、平気で吐きか

ねないって。…思っちゃったんだ。

…ほら！わたしって活動的な方じゃない？考えたらすぐ突っ走っちゃうっていうか、考えなくとも体が勝手に動き出すっていうかさ。だからわたし、珍しく考えたんだよ？どうすれば龍也くんがわたしのことを大切に思ってるかわかるかな、って。そして、考えて、考えて、さっきの嘘を思いついたの…。

龍也くん、お金持ちでしょ？でも、その割にはお金を使うのを嫌がってたし、ホントに必要なものにしかお金を使わないじゃない？だからもしわたしが誘拐されて身代金を要求されたら、龍也くんはわたしのためにお金を使ってくれるのかな、って…。

ここまで考えて、最初は考えるだけだったのに、そのときになって脳の活動的な部分が働き出しちゃった、っていうか…。確かめなくなっちゃって…。

それで、近くを通りかかったおじさんに無理矢理手伝わせて、おじさんに電話をかけさせたの。…あはは、おじさん大活躍だよね。

それで、三十分くらいたったあたりで、おっきなバック持った龍也くんが、汗だくで公園に走りこんできたの。…龍也くんの姿が見えたときには嬉しかったなあ。…ところで、なんで乗り物使わなかったの？…え？そこまで頭が回らなかった？必死だったから？…えへ。

ま、それで、わたしの無事を確認した途端、龍也くんはわたしに抱きついておんおん泣いちゃったのでした！おしまい！

今回のことで、龍也くんがわたしのことを大切に思ってくれていることがわかったから、満足しました！ゴメンね？龍也くん…。二度とこんなことしないよ。まさか、龍也くんが泣くほどわたしを心配してくれてるとは思ってなかったから…。期待はしてたけどね？」

とまあ、そんなことらしい。

まったく、なんたることだ。

俺としたことが、情けない…。

雪音に涙を見せたことは、どうでも良い。

問題は、雪音にすべて見破られていたことだ。

あの時に言った言葉は、その通り、その場凌ぎの嘘だったこと。

俺ならば、そんな嘘を平気で吐けるということ。

俺の所為で雪音に不安感を抱かせてしまったこと。  
それは俺にとって、最大の汚点となるだろう。

俺は、嘘を吐くのが得意なつもりだった。

誰も俺の嘘を見抜けないと思っていた。  
何故なら、俺はこれまで、自分に嘘を吐きすぎたから。

俺は自分を騙してたんじゃない。

俺は、自分自身を誤魔化して生きてきたんだ。

自分に嘘を吐き、その嘘に自ら騙されることを強要してただけなんだ。

そんな奴の嘘なんか。

誰が騙されてくれるものか。



俺はこれまでの所業に絶望した。

人を騙して生きてきたと思っていた。

他人は生きる価値など無い、何故なら俺の嘘に簡単に騙されるから。そんな程度の人間など、生きる意味など無いだろうと。

そう思っていた。

だけど、本当は違った。

生きる意味が無いのは、俺のほうじゃないか…！

「ほらほら！なにをそんなに悲痛な顔をしてるの？わたしは無事だったんだから、それでいいじゃない！」

「……ごめんな」

「……へ？」

「ごめん、俺がいつも適当に雪音のことをあしらってたから、お前を不安にさせちゃった…。」

「べ、別にいいんだよ？今回のことで、龍也くんがわたしのことを人並みに大切に思ってくれていたことがわかって、わたしは安心してるんだから！」

「いや、俺は安心できないし、満足もできない」

「…だからあ、別に大丈夫だって」

「俺が大丈夫じゃないんだ。今回のことではつきりした」  
「認めたくないが、俺は雪音のことが好きだ」

「俺と付き合ってください、これから俺をよろしく頼みたい」

うまれて初めて、俺は告白というものをした。

今までは、言い寄られることばかりだった。

誰とも付き合ったことは無いとも言わない。  
でも。

こんな気分になったのは初めてだ。

結果を聞くのが怖くはあったが、それでも少し、すつきりした。  
心を感じがらめにしていた鎖がとれた気が、した。

「そんなことをいちいち言わなくても」  
「わたしはずっと、龍也くんをよろしくしてあげるよ？」

「ありがとう、龍也くん、わたしもだいすきだよ！」

頬を赤らめながらも、ちゃんと口にだして言ってくれた。  
そのときの雪音を、俺は今ままで一番愛しく感じた。

どちらからともなく抱き合い、口付けを交わす。

今までの誰ともしたことが無いような、深い、口付け。

俺はこの瞬間。

自分が生きていく意味を見つけた。

## Chapter 14 : Find (後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

遅い更新でしたが、待った甲斐はあったでしょうか？

今回は、無い脳みそを絞って絞って書きました。

正直、書いた後自分で読み返し、泣きました…。

多分僕が親バカなだけかも知れないですけど。

僕が味わった感動を、是非読んだ皆さんが感じ取れたらと心から思います。

ちなみに、最終話っぽいですが、まだ続きます。

感想、意見等、よろしく願います。

## Chapter 15: 暴露&和解(前書き)

遅い更新は命取り。

## Chapter 15：暴露&和解

「俺たちは付き合うことにした」

「ええええええええええええ！？」

俺はバカ正直に、これまでの経緯とこれからの人生設計について、馬鹿正直に話した。

・ ・ ・ ・ ・

話し終えて、ふたりはため息と同時に、

「ありえないですう！！」

叫んだ。

まるで必死の形相だ…。

「私の方が龍也さんを愛しているに決まっています！雪音さんごときに龍也さんを渡すわけにはいきません！」

「そうですね！龍也先輩はあたしのものなんです！」

「ちがうよ！わたしが付き合うつて決めたんだからわたしのものの！」

睨み合う三人。

……まあ、予想はしてたんだけどな？

もしかしたらという淡い希望に身を任せてみたんだけどな？  
やっぱこうなるオチなんだな……。

てか、ことごとく期待を裏切らない奴らだなお前らは！

「ま、まてまて！少し落ち着け！」

「『落ち着けるわけじゃないか！』『』」

……おうおう、俺が何か言うと三倍で返ってくる……。

「……あのな？これは俺が選んだことだ。自分でも勝手だとは思って、口出しは許さないぞ？」

若干凄んで言うてみるが。

……内心恐ろしくてたまらん、所詮はつたりだ。  
しかし、

「『』『』『めんなさい……』『』」

効果はてきめんだった。

上手くいきすぎるとやっぱり怖いものがあるな…。

「でも、簡単に引き下がるわけにはいきません」

「…そうですね、龍也先輩が大好きなのは、みんな一緒なんですう！」

…うーん。

「でもな？ 躑躅には言っていない、というか、こんな事になるとは予想してなかったもんだからすっかり忘れてたけど、この中には、俺がお前と付き合う意思が無いことを事前に言っていたはずだけど…？」

ちよつと昔のことを持ち出してきて、反論を試みる。が、

「そんなこと忘れました！ 今更関係ありません！ 龍也さんだって私があなただけのことを好きなのを知っていたのでしょうか？ それなのに、…うう、こんな仕打ち、あんまりです！」

「そうですね！ あたしだってずっと前から龍也先輩に目をつけてたんですよ！？ それこそ雪音先輩がこっちに来るまでは、昼夜を問わずずっと龍也先輩の後をつけて！ 龍也先輩のことを寝るときまで考えて！ 龍也先輩でいやらしい妄想にふけていたんですう！ それなのに！ それなのに突然来た転校生にあっさりすっかりごっそり盗られてしまうなんてえ…！ 酷すぎるですよ！」

…最後のいやらしい妄想云々は余計だよな？



いや、他のやつもホントは余計なんだが、この頃のこいつらの奇行で耐性が出来ているのかもしれん。…うーん、慣れは怖いな。

「…あんたたちねえ、言わせておけばあっ！」

ついに雪音が切れた。

「まったく！今まで尾行したりラブレター書いたりちまちまやってる暇があんなら、もうちょっと積極的にアピールすればよかったじゃない！あんたたちがのろのろしてるからわたしが電光石火でとつてったんじゃないの！ちゃんと面と向き合って会話をすれば、大抵の人は誰でも仲良く出来るもんなのよ！それなのにあんたたちはうじうじと！大体ねえ、人間同士の関係に、早いも遅いも無いのよ！時間じゃないの、質量なのよ！わかる！？密度よ、密度！どんなについ最近あつたばかりでも、そんなの全然障害じゃない！問題はその人と、どれだけ色んなものの詰まった時間を過ごすかなのよ！躑躅ちゃんだって、尾行してただけで、そこからのアクションは何も起こしてないじゃない！精々名前を覚えてもらった程度でしょ！？あんただって本気だったのはわかるよ？でも、それだけじゃ何も始まらないじゃない！」

「……………うう」

「このはちゃんだってそう！あんたが極度の恥ずかしがり屋さんで、龍也くんの手紙を書くのも、大変な勇気が必要だったことは、これまでの付き合いでわかったよ？本気の手紙だったのに、目の前で破り捨てられちゃったときのショックだって、計り知れないとおもう。実際、登校拒否になるくらいだったんでしょ…。でもね？そこで止めたならなんにもならないじゃない！せつかく勇気を振り絞って書いたんだから、とりあえず面と向かって告白しちゃえば良かった

たのよ！あなた、可愛いんだから、ちゃんと言ってれば今頃きつとらぶらぶだったよ？今頃言っても遅いけど…、とにかく、あんたたち、行動が遅すぎたのよ！」

「……う、うつつ」

「わかった！？わたしを恨むのは筋違いってもんよ！……あーあ、びつくりマーク付けすぎて血圧上がったじゃないの……」

「「わ、わかりました……」」

お？やっと認めてくれたか。

「龍也先輩のことは、今回のところはあきらめておきます。しかし！隙あらば横から搔っ攫っていくので、そのところはご了承くださいー！」

「右に同じですう、…じゃあ、荷物をまとめますう…」

「はあ？」

こいつ、なんつった？

「だって、龍也先輩たちは付き合っただけでしょ？あたしたちがいたら邪魔じゃないですか」

躑躅の横でこくこくとうなずくのは。

…どうしたものか。

「いや、その件なんだがな？お前らは引き続きここに泊まってもらいたいんだ」

「『え？』『』」

…いつせいに意外そうな表情を浮かべ、こちらをみる。  
いや、実際に意外だったんだろうが。

「付き合うといっても、しばらく俺は健全なお付き合いをしたいと考えてる。そのためには、此処で二人で暮らすというのは、俺の貞操を考えて危ない、ということで、二人にはこのままここにしばらくの間居座ってもらう。まあ、いつまでもこんなウブなこと言ってられないことはわかっているんだが、そういう関係になるのはまだ早いかなあ…、とか」

「…な、なんてこと」

雪音の顔がショックに歪んでいる。  
ありやま。

でもしかし、

「あ、ありがとうございます！」

「やったあ！まだ先輩と一緒にくらせるですう！」

こっちの二人は大はしゃぎだった。

俺と雪音の間に置いての肩書きは変わったが、それ以外はほとんど

変わることが無いまま。

もちろん、いつか一線を踏み越えなければなくなるときがくるだろうが、それまではこのままの関係が、だれにとっても居心地がよいことは、みんなが良く知っている。

それまでは、誰一人欠けることなく、ずっと平和にいたらいいなと。

そう思う、今日この頃だった、まる。

なんて、感動的に終わりたいものだが、無論、そんなことがない事をこの俺は確信している。

残念なことに、雪音という生き物に落ち着き、という言葉が無いことを俺は知っているからな。

## Chapter 15：暴露&和解（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

一段と遅い更新。

ほんつつつとに、申し訳ありませんでした…。

色々言い訳させてもらうと、…ある賞に応募しようと思っている小説を執筆中なのです。

努力はしますが、これから先、こんなことがあるかも…。

頑張りますので、見捨てないでえ…。

## Chapter:16 進行停止(前書き)

遅くなりました…。

## Chapter : 16 進行停止

そんなこんなで、俺と雪音は付き合うことになったのだが…。

「チッキショー！！納得いかねえ！！」

雪音の叫びが、今日もこだましていた。

変わったのは二人の立ち位置だけ。

このはも躑躅も同じ家に住み、夜の秘め事もさっぱり無し。  
夜な夜な夜這いを掛けてくるも、一蹴する俺。

そんな堂々巡りの状況に、嫌気が差したようだった。

そんなこと言っただって、仕方ないじゃん？

俺、童貞だし、なんか怖いし。

きつと、そんな状況になったら、雪音がしっかりリードしてくれる  
気がするんだが、それでも進んでやろうとは思わない。  
いや俺、基本根性なしですから。

とまあ、こんな言い訳を色々と考えてみるわけだが、結局のところ、  
俺が優柔不断なだけだ。

雪音には色々と迷惑をかけるかもしれないが、少し我慢してもらおう。

「しょうがないだろ？俺たちはまだ未成年なんだぞ？」

「いまどき、高校生でもやってることはやってるの！」

「こ、こら、なんてことをいつてるんだ…」

「照れるなー！ー！」

だつて、恥ずかしいもん。

「まったく！いつもいつもクールに気取ってるくせに、なんでそういう関係のことは全く駄目なの…？」

知るか。

なんかトラウマでもあるんじゃないのか？特にお前に対して。

「てことは、あたしにもチャンスがあるってことですよねえ…？」

「そ、そのようですね…。いつそのこと、二人で協力して…！」

こ、こいつらの目が光ってる！

少しずつ本性をあらわしつつあるな…。

「お、お前らは何故そんなに積極的なんだ！？一般的には、男性より女性の方が性欲は少ないんじゃないのか！？」

…つて、学校でいってました。

「それは先輩が女を知らなさすぎるんですう！」

「わたしだって、好きな人と一つになりたいと思います！」



「そーだそーだ！龍くんが分かってないだけなんだい！」

むーん…。

き、厳しい…。

「と、とりあえず！俺の調子が整うまで待つてくれよ！」

「そんなこと言って！また逃げるんでしょ！？」

イエイエ、ソナコトハアリマセンデスヨ、ハイ。

「不自然な片言をしゃべるなあゝ！」

「ハ？ワタシニニホンゴ、ムスカシスギデース。モット、するーデハナシテクダサイ」

「誤魔化すんじゃないわよ！」

畜生！これでいけると思ったのに…！

「いけるわけないでしょ！」

「げふっ！？」

こいつ、彼氏に向かって膝蹴り食らわしやがった…。

「ひ、ひどい！雪音は、本当は俺を愛してなかったのか！？」

「へ、へえ！？」

「俺はこんなに雪音を愛してるっていうのに！雪音は俺を足蹴に…  
うう！」

泣き崩れる俺を前に、おろおろする雪音。

…へっ、ちょろいもんだぜ。

「わ、悪かったわよう…、だから、ね？泣かないで？」

「うう、…ぐすん、…うん」

「ほおら！いい子いい子！」

「このはさん！雪音先輩が翻弄されてますう！」

「きゃあっ！駄目っ！なんか、私たちの前でこういう姿を見せられると！と、溶けちゃうう…！」

まあ、本当は二度と使いたくない手だが…。

…今回ばかりは仕方が無い。

「雪音えゝ、俺のこと、…好きい？」

「いやー！…！大好き大好き！もうどうにでもしてえー！！」

「…と、溶けちゃう…っ！！」

我ながら汚い手を使うが…。

この手にはめられるあいつらも、相当おかしいよなあ…。

こうして、ごまかしごまかししていられるのも、いつまでだろうな…。  
今俺にくっついてるこいつらだってバカじゃないだろうし、いつか押し切られる日が来るのだろうか…。

考えただけで背筋が寒くなるが、拒否し続ける俺も、甲斐性なしのレッテルを貼られそうで嫌ではある。

ということで、どうしてもな時には快く受け入れてやることにしようか…？

「ああ〜ん！龍也くん！好き好きい〜！！」

「「溶けちゃう〜！」」

「いい加減離れる貴様ら！」

やっぱししばらくは止めといたほうが良いだろうか…？

## Chapter:16 進行停止(後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

すいません…、とっても遅くなりました…。

受験生の恐ろしさを実感させられた感じです。

いやぁ、PCを立ち上げることもなかなか出来ないとは…。

感想、よろしく願います。

## Chapter:17 悪魔のコンペニ(前書き)

どっさり更新遅れました…。

## Chapter:17 悪魔の「ンビ」

「ぐぬぬぬぬう…、うがあああっ！」

雪音の我慢が、どうやら限界に達したようだった。

なんの脈絡も無く、雪音は俺に飛び掛り、ベッドへ押し倒す。

「うおっ！？お、おい！落ち着け！よく見る、俺だ！」

この場合、俺であるとしてもなんの関係も無いのだが、とりあえずそう叫んでみる。

と、雪音は我を取り戻したかのように目をぱちくりし、頭を振って考えこんでいる。

「おーい…、大丈夫かあ？」

とりあえず声をかけてみる。

「大丈夫なわけあるかあ！！」

いきなりの大声、びっくりするなあもう。

「何が大丈夫じゃねえんだ？俺に話してみ？」

「コ、コノ野郎…！そもそも龍也君の所為じゃないかあ！！」

「俺が一体何をしたらって言うんだよ！！」

逆切れ合戦。

いや、なんで怒ってんのかは大体予想がつくんだが…。

「なんでよ！？なんでわたしとX<sup>ビ</sup>X<sup>ト</sup>X<sup>ト</sup>してくれないのぉ！」

「こ、こら、女の子がなんてことを…」

「だから照れるなー！！」

いやいや、男の子はナイーブな生き物なんだ…。

「いつまで待てばいいのよ！なんなのこの放置プレイ！！」

「こ、こら、女の子がプレイだなんて…」

「うつせー！！プレイ以前の問題でしょうが！」

まあ、そうなんですけど。

「俺あ、誰かと付き合うのは初めてなんだよ！どうすりゃいいのかさっぱり分かん」

「だあかあらあ！わたしが色々教えてあげるから！わたしだって経験無いけど、每晚每晚イメージトレーニングだけは欠かさないんだから！」

こー言うのは初めて同士がやっても、大抵碌なことにならないと思うんだけど…。

「そんな事はこの際ナシよ！ナシ！とにかく頑張ればいいのよ！」

「いや、精神論じゃどうにもならねえから！具体案を考えよう！」

「具体案ってなによー、エロ本でも見ながら、本の通りにやってみるとか？」

「女の子がエロ本だなんて…」

「しつこい！！」

うーむ、しかしそうなる…」

「エロ本を買ってこなければならぬのか…？」

「うーん、そうかもねえ…、龍也くん家、男の子の家なのに、何故かエロ本置いてないし」

俺はエロ本など手に取ったことはありません、魂が穢れるからね…。

「そんなこと言うてるからウブなネンネみたいに育っちゃうのよー！」

「お前だって生娘だろうが」

「わたしはいいのよ、性に開放的だから」

「高校生が性に開放的とか言っつなや」

「ま、とりあえず、わたしたちの第一歩のために、エロ本調達に行きましょー」



な、何故そんな話に!?

「だって、龍也くんには少し変態になってもらわないと」

「いやいや、知識を仕入れるだけで良いんだろ!? ほ、ほら、保健の教科書とか読めば…」

「それじゃあ面白くないでしょうが!」

「ひ、ひいつ!?!」

「ほらほらあ! グズグズしないでさっさと出掛けろ!」

「ぎゃあああああああ!」

ずるずると引きずられていく俺だった。

・ ・ ・ ・ ・

着いた先は、コンビニだった。

のっしのっしと歩く雪音の後ろについて、中に入っていく。

雪音が向かっている先は、

<成人向け雑誌コーナー>

俺は回れ右、一目散に外へと駆ける！

「…逃がすかあ…」

雪音（般若バージョン）が俺の服の襟をつかんでいた。

「もう…、逃げられないのか…」

親猫に首筋を噛まれて連れて行かれる子猫のように、俺は哀れ、雪音に引っ張られていくのだった。

「ほい、とーちやくー」

無駄に嬉しそうな雪音の声色。

恐る恐る前を見ると、

「い、いやああああー！」

「ほら！恥ずかしがらない！」

「う、うつつう…」

雪音にあやされつつ、成人向け雑誌を吟味する。

「ねーねー、こんなのどお？」

「うーん…」

「こーいうのもやってみたいよねーっ！」

「うーん…」

カップルでエロ本を読んでいる状況というのは、いささか奇妙な風景であろう。

案の定、コンビニの客どころか、店員さんまでこっちを見ている始末。

「も、もう耐えらんない…、適当なの何冊か買って帰ろっ…」

「うんっ！わかったーあ！」

雪音が何冊か雑誌を引つつかみ、レジへ駆けていく。

「はぁ…」

「龍也くーん！お金お金ー」

「うん？はいはい…」

店員さんに不思議そうな眼で見送られながらも、俺たちはこの魔城から脱出したのだった。

いやー、エロ本買うなんて初めてだ。  
貴重な体験させてもらったぞ。  
しかし、もう二度とごめんだけどな…。

## Chapter:17 悪魔のコンビニ(後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

本当に申し訳ありません…。

僕、受験生なもので、この頃PCさえも使えないんです…。

ということで、これからまだいぶ遅れてしまうと思いますが、どうぞ、首を長くして待っていてください。

## Chapter : 18 優しい帰り道

「ふふん、ふふふん、ふふふうんふー」

工口本買った帰り道。

雪音はやけに上機嫌なのだった。

「これでえー、龍也くんとおー、XXXとかXXXが出来るうー」

あまりにも不純な鼻歌だった。

ていうか、大通りでそんな歌、歌うなよな……。

「あのなあ、そんな本買ったって、直ぐに俺がその気になると思ったら大間違いだぞ？」

「うんー、……へ？」

コイツ、家に帰ったらイケナイお遊びをする気満々だったんだろうな……。

幸せ妄想に水を差してしまったか？

もう見てくれよ雪音の顔。

言葉じゃ言い表せないくらい絶望的表情。

見てるこっちが哀れになってしまふような姿であった……。

「可哀相だと思っなら相手してよ！」

「それとこれとは話が全く別だ、俺はやっぱ気が乗らない」

「なんでよ！？せつかく夢いっぱいの未来予想図展開してたのにい

「！」

それは夢というのだろうか？

かなりの勢いでデッドでマッドな雰囲気をかもし出す言葉だった。

「大体、俺の家にはこのはと躑躅がいるんだからさあ……」

「そんなの、ホテルに行けば良いだけの話じゃない！」

「うん？……な、なにい！？」

ホ、ホテルだとう…？

「そ、それは無理だ！とりあえず値段の相場が分からん！」

「うつさい！お金持ちのくせして！しかも、わたし知ってるんだから！夜中に龍也くん、バイトに行ってるでしょ」

「……………う」

な、何故バレている…………？

ちゃんと毎回、寝ているのを確認してから家を出ている筈なのに…。

「ちゃんと知ってるよー？毎日一時頃からバイトしてんのー」

「何で知ってたんだ？お前ら、毎日ぐっすり寝てるじゃないか！」

「それは、龍也くんの家には隠しカメラが付いてるからだよ？」

き、キサマなんてことを！

「ま、待て待て。…それは本当の話か？」

「うん、リビングからお風呂、果てはトイレの中までばっちり！」

「があああああぁあぁあぁっ！！！！？」

プライバシー！！

俺のプライバシーは何処へーっ！？

「大丈夫だよー？他の人たちには見せてないからー、えへへ」

「そういう問題じゃねえだろう！？直ぐに取り外せ！」

警察呼ぶぞ警察！！

「それはダメだよー？取り外しちゃったら、わたしは今日からどうやって龍也くんできやらしい妄想をすればいいのか…」

「そんな習慣は必要ねー！！！」

ていうか、何、こいつ、俺のトイレとか普通に見てたのか…？

「うん…、龍也くん、オトコらしいモノをお持ちで…」

「いやあああああ！！！」

こ、こんな…、生き恥以外の何物でもないようなことが……。

「もういい…、俺がバカだったんだ…死ぬしかない、もう…死ぬし



かない！」

いいんだ、どうせ俺なんか…。

このまま雪音たちに全てを搾取されて死んでいく運命なんだ…。

「ああ…、死兆星が見える…いや、最早なんにも見えねえ」

「だ、大丈夫？ 龍也くん…、そこまでブルーになるとは思わなかったから…」

「これがブルーにならずにいられるか！」

ああ…、少しでも雪音に癒された俺がバカだったなあ。

「あーあ、人間って、生きてる意味あるのかなー」

「龍也くんが、無気力過ぎて最初の状態に戻りつつあるー！？」

「もーいいよ、何もかもなかった事にしてくれ…。俺は雪音とは出会わなかった、それでいいな…？」

「だ、だめだよ！ せっかく付き合っただから！ って、ちょっと待って！ 置いてかないで！」

俺の肩に手をかける雪音。

「…はい？ あの、どちらさまでしょうか？」

「忘れられてるー！？」

「すいません、急いでるんで…」

「ま、待って待ってえ！」

……お？

心なしか、雪音の声に涙声が混じってるような気が…？

「…う、うえええん…」

な、泣いた、雪音が泣いた…。

俺が、…泣かせてしまったー？

案の定、後ろを振り向いて見ると、道路の真ん中で座り込み、大泣きしていた。

こ、これはヤバイ。

かなりまずい。

俺が泣かせておきながら、こんな状況になっちまうとは。

「……………」

しかし、気まずさより先に、雪音への愛しさが先に立つ。

「…嘘だよ、ごめんな」

「ふええ？」

俺は無言で雪音を抱きしめる。

これくらいしか思いつかないからな。

「俺が雪音を心の支えにしてるんだ、忘れるわけ、ないだろ？」

「龍也くん、りゅうやくうん…」

優しく頭を撫でる。

「ずっと離さないからな、永遠に一緒だからな…」

道の真ん中でこんなことするのはかなり恥ずかしいが、雪音には代えられない。

雪音の額に軽くキスをして、ゆっくりたたせる。

「さ、帰ろうぜ？みんな待ってるし」

「うん…、ありがとう…」

今回は俺が悪いわけじゃなかったが、雪音を悲しませたままでは代のは寝覚めが悪い。

このことで、俺はずっと雪音のそばにすることを、誓わせられたのだった。

## Chapter:18 優しい帰り道（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

なんていうんですか、寂しいです。

僕にも恋人はいますが、こんなスイートは夢のまた夢です…。

というのは置いといて、感想を書いてくれる人が全然いないんです…。

お願いします！感想プリーズ！

これでは僕は、何を糧にして小説を書いてゆけばいいのかと！  
毎回感想ページを開いて、とてもがっかりするんです…。

お願いしますー！

## Chapter:19 激闘(前書き)

入試終わったーあ！

## Chapter : 19 激闘

そんなこんなで愛しの我が家。

何事もなく（まあ、色々あったんだけど）、無問題で帰宅した。

「はあゝあ……」

ずっと雪音はこんな感じだった。

あの後、しばらくは納得しておとなしくしていたんだが、五分くらい経った途端暴れたのだった。

道の真ん中で、卑猥な言葉を叫びまくる雪音は、ある意味閻魔大王よりも恐ろしい形相をしていたのは、言うまでもない。

それから、頑張って雪音をあやし、家まで引っ張ってきたのだが…。

「はあゝあ……」

ずっとこの調子なのだった。

雪音が激しく放っている不幸に慄き、このはや躑躅も近寄れないでいる様だ。

ものすごく、他から見れば哀れに映るのだろうが、事情を知っている俺は、心配をすることも、増してや優しい言葉をかけることもしない。

その状況を見た二人が、

「もしかして、喧嘩しちゃったんですかあ？」

「へええ！？お二人が喧嘩だなんて！！」

こんな風に勘違いをしてしまうのも無理はない。  
そろそろ、何か声をかけてやる必要があるかな…？

「なあ、雪音…いつまでもむくれてんなよ」

「……………むくれてないもん」

どうせそんなことを言うと思っていた俺は、必殺の言葉を口にする。

「雪音と一緒に、……………さっき買ってきた本、読みたいな？」

「おっけいおっけい！…さあ読もう今読もうすぐ読もう！」

ほらなあ、一撃必殺技だ。

ということ、勢いのままにいつてしまった事で、本当に一緒にエロ本を読まなくてはいけなくなってしまった俺。

こっからは地獄だ。

「うふふー、見てみてえ…これが×××××だよ。龍也くんにもしてあげるからねー！」

「う、ううう、うううううううう……………」

早くもギブアップの兆しが出てきた俺。

くそう！恥ずかしくもいやらしいことを、そんな臆面もなく……………！

「それでねえー、これが…」

「すいませんごめんなさいもつしませんー！…」

俺ギブアップ。

早っ！！

「もおだめだあ…、助けてくれえ、俺には無理だあ…」

厳しいって！これは厳しいって！！

俺もう半泣き目状態。

「なんか、龍也くんのキャラクター、だんだん軟化していくよね、最初の頃は思春期のピュアボーイのように、尖ったこと言ってたのに……」

「それは昔のことだ！今の俺は思春期じゃないピュアボーイなんだ！そのように扱ってくれえっ！」

「龍也くん…、生きる意味を教えてあげるよあ…それは、…子孫の繁栄だあっ！！」

「きゃーーーーっ！」

こいつに、男にもセクハラは通用するということを教えてやりたい…。

「ちょっとお！龍也先輩になにやってるんですかあっ！」

「そうです、勝手なことをしないでください！」

おおっ、力強い加勢だっ！

「お前ら、助けてくれっ、俺の貞操がぴんちだ！」



しかし、俺はすっかり失念していた。

こいつらも、こと俺への執着心については、雪音に負けていないと  
いうことをっ！！

「雪音せんぱーい！あたしも仲間にいれてくださーい！」

「わ、私も！わたしもお願いします！」

雪音に新しい仲間が加わり、敵勢はパワーを増した様だった。

……………ここは…！

「逃げるしかねえ…！」

敵の勢いが増加した今、まともにぶつかるのは自殺行為に等しい。  
俺は、三人に背を向けると、一目散に玄関を目指して駆け出す。

「まっ、待ちなさいよっ…！」

「待つわけねえだろ！」

一心不乱に玄関目指して駆ける。  
しかし、

ビタンっっ！！

「ふぐえっ！」

何かが足に引っかかり、勢い良く転んでしまった…。

足を見ると、掃除機のコードが絡み付いていた。

コードの先には…、

「雪音っ！お前なんてことしやがる！頭打つたらどーするつもりだ！」

「打たなかったから良いじゃん！龍也くんが逃げるのが悪いんだよ！」

「誰だって逃げるわ馬鹿野郎！」

「龍也先輩、往生際が悪すぎですっ！」

「そうですそうです！神妙にお縄についてください！」

じりじりと迫ってくる女軍団。

逃げるためにコードを解こうとするが、

「うお！？何でこんなに素晴らしいまでに絡まってるんだ！？」

「ふっふーん、こんなこともあるつかと練習しといたんだ！」

「無駄な努力すなー！」

コードを引っ張って、俺を手繰り寄せる雪音。  
ずるずるとフィッシングされる俺。

「ようーし、龍也くん、キャーッチ！」

「あーんど、りりーす？」  
「しないよっ！」

可愛い感じで見上げてみても、雪音の心に火をつけるだけだった。  
俺、今度こそ絶体絶命！？  
全員が、俺の服を脱がしにかかる。  
そのときっ！

「ちわーす、宅急便でーす」

なんと宅急便が！

てか、何でインターホン押さなかったんだ？

「た、助けてくださーい！」

ここぞとばかりに叫ぶ俺。

「ど、どうしたんすか！今助けにいくつす！」

ナイス宅急便！

爽やか系おにーさんが玄関に入ってくる。

そして、足を止めて啞然とする。

半裸で倒れている俺。

足には掃除機のコードが巻きついている。

俺に巻きついている女三人。

ふと視線をそらせば、リビングの机に置いてある、開きっぱなしの  
エロ本。

「……ああ、新手のプレイっすね」

宅急便のおにーさんは、遠い眼をした後、荷物を置いて去っていった。

……何か大切なものを失った気がする。  
なんだろうか、この虚無感。

「はぁ…、もう何でも良いや」

「おお、龍也くんが投げやりモードに!？」

「もう好きにしてよ…、抵抗しないからさ…」

あれ、なんだろう、涙が止まらないや。

「ご、ごめんて龍也くん!泣かないで泣かないで!ほーら、よしよし」

「泣いてなんかいいよ…、泣いて…なんか…」

そして、泣き声を上げながら雪音の胸に飛び込む。

よし、今回は難を逃れた感じだな。  
我ながらずる賢い…。

だが、今回は煙に撒けたものの、次からどうなるか分からない。  
真剣に対策を練るようにしないと、危険だな…。

## Chapter:19 激闘(後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

やっと入試が終わりました！

志望校に合格できたので、心にも時間にも余裕ができましたので、これからは更新日時を短縮できると思います！

待っていてくださった皆様、ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0205d/>

---

I with...

2010年10月13日21時10分発行